
優しい風の吹く場所に

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい風の吹く場所に

【Nコード】

N4463K

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

目的のために犠牲を厭わなかった碇ゲンドウ。だが、次第に彼の心はほころびが生じて・・・。

（前書き）

新世紀エヴァンゲリオンの二次創作となっております。

開け放たれた大きな窓から、風が入りこんできた。

ふわりと揺れる薄いカーテンにあわせ、穏やかな光が作り出す影が踊っている。

それは時間が止まったかとも思えるような静かな昼下がりであった。

真っ白な部屋の中においてあるチェアに腰掛けた妻が、私を見上げる。

「気持ちいい風ですね」

ああ……と小さな声を返すと、私は気持ちよさそうに眼を細める妻の顔を見つめ返した。

一年中夏となったことを喜ぶかのように、遠くで蝉の合唱が聞こえ出す。

その隙間に時折織り交ぜられる、楽しげな子供の声。

「私たちの子供も、あんなに笑ってくれるんでしょうか」

楽しそうな、しかしどこか寂しそうな表情を浮かべながら、彼女は自らの腹に触れた。

「この地獄のような世界で、本当に幸せになれるのだろうか……」

私の独白に、暖かな視線を投げかける。

「生きてさえいれば、どこでも天国になりますわ・・・それに、あなたの子ですもの・・・幸せに・・・自分と、誰かの幸せを、作ることができるはず・・・」

「・・・そうか」

静かに呟いた私を見つめると、ユイは笑った。

目が覚めると、部屋の中には光が満ちていた。

いつのまに寝てしまったのだろうか。

開け放たれた窓から吹き込んでくる風が、机に押しつけたまま眠ってしまったために赤くなった頬を優しくなでていく。

この心地よさが、あのような夢を見せたのだろう。

しょぼついた目をこすろうとしたとき、目元が湿っていることに気がついた。

「涙・・・か・・・」

ユイが消えてしまったあのときに枯れ果て、流す資格も無くなってしまったと思っていた涙が、私の頬をぬらしていた。

その事実が滑稽で、だが少しだけ切なくて、私は笑った。

自嘲の混じった笑み。

彼女にもう一度会つために息子までも捨てた男が、今更涙など流してどうするのだろうか。

おかしくておかしくて……再び涙が流れた。

自宅からネルフの自室へと向かう道すがら、私の足は食堂へと向かっていた。

なぜかわからないが、暖かいものが飲みたかった。

一流の店……とまではいかないが、自販機よりもよほど美味しい珈琲がそこにはある。

執務室からでも電話で呼び出せばすぐに届けてくれるが、自らの足でそこまで向かいなかった。

どうしてそんな気持ちになったかはわからないが、そんな気持ちになることもあるのだろうと一人で納得する。

自動ドアをくぐると、そこにはレイと二号機パイロット、そしてシンジが談笑していた。

二号機パイロットがシンジに文句を言い、それに言い返すシンジ

を、レイがかすかな微笑みを浮かべながら見つめている。

普通の中学生の、普通の生活。

だが、それが繰り広げられているのが普通ではない場所だなんて、
皮肉もいいところだった。

普通ならば恋愛と友情とテストの点数が最大の悩みであるはずの
年頃。

その彼らが、人類の滅亡を防ぐためという大義名分に踊らされ、
人外の化生との戦いに駆り出されている。

それが醜く独りよがりな陰謀だとも知らずに。

私は珈琲をあきらめると、彼らに気づかれないようにそっと部屋
を出た。

しばらく立ち止まっていた私が再び歩こうとしたとき、不意に声
をかけられた。

「碇指令……どうしたんですか？」

ゆつくりと顔を上げると、そこには白衣に身を包んだ女性が立っ
ていた。

「はい、どうぞ」

白いカップに入った琥珀色の液体が差し出される。

芳醇な香りが、部屋の中に満ちていく。

その香りが心までも溶かしていくようで、私は無言のままカップを受け取った。

温もりが手の中に広がっていく。

真つ白な湯気が、サングラスのレンズを曇らせてゆく。

極端に狭まった視界を気にせず、薫り高い珈琲を口の中に含んだ。

「……うまいな」

自分でも意識していない感嘆の言葉が、ひとりでに唇から紡がれてゆく。

彼女がいれてくれた珈琲は、本当にうまかった。

珈琲を専門とする喫茶店の中でも、これだけの味を出せるのは限られているだろう。

食堂で珈琲をあきらめたことが、幸運なことのように思えてくる。

しばらく無言のまま味わっていると、彼女が私を見つめていることに気づいた。

視線を向けると、その顔に笑みが浮かぶ。

「よかったですわ、気に入ってもらえて」

嬉しそうに言った彼女の表情が眩しくて、私は目を細めた。

「本当にうまいな……どこかで勉強を？」

「いえ、独学です。ミサト……葛城三佐の入れてくれる珈琲があまりにも……その……」

「ああ……彼女の料理の腕前は、ある意味才能としか言えないからな」

私の言葉に驚いた顔をした後、彼女が吹き出した。

「どうした？」

「いえ、なんでも。……ふふつ、あなたが冗談を言うなんて思わなかったもので」

「冗談を言った覚えはないのだが、彼女の無邪気な笑顔を見ていると反論する気も失せてくる。」

ひとしきり笑った後、彼女は言った。

「今日はどうします？もし忙しくなければ、その……」

「ああ、今日の夜は空いている。君の都合がよければ、食事にでも……どうした？」

再び驚いた顔をした彼女に、おもわず問い返した。

今日は本当に珍しい日だ。

彼女の驚く顔など、いままでほとんどみたことがなかったのに。

「・・・食事に誘ってくれるなんて、思わなかったから。いつもなら、この場所で私を抱くのにな」

非難している口調ではなかった。

純粹に不思議に思っているようだ。

「私にだってそういう日はある。人をけだものみたいに言わないでもらいたい。・・・いや、けだものかもしれないが」

少し自信のなくなった私の声に、再び彼女は笑った。

じっとみつめ続ける私に気づいたのだろう、笑い続けていた彼女が見つめ返してくる。

そうとうおかしかったのだろう、その目には涙が浮かんでいるが。

「笑った顔の方が・・・綺麗だな」

「な、何を言っているんですか」

彼女の顔が、赤く染まる。

恥ずかしそうにうつむく彼女がおかしくて、愛しくて・・・私は笑った。

思えば、あのときから私の心は少しずつ、少しずつ変わっていったのかもしれない。

厳しい冬の大地に春が訪れるときのように、それは本当にゆっくりとした変化だったが、固く凍り付いていた私の心が、彼女の心に溶かされていく。

全ての使徒が倒れ、私の計画が遂行されるかというとき……私はその計画を破棄することを選んだ。

狂気に身をゆだね、狂喜へと突き進んでいたこの私が、ユイとの再会を諦めた。

それは自分でも驚きだった。

妻との再会のために、息子までも地獄へ落としたこの私が、いまさら人の心をもつなんて、あまりにも安っぽい物語だった。

だが、人の温もりに溶かされ、柔らかくなった心は、シンジを孤独にすることを選べなかった。

レイに人の心を捨てさせることはできなかった。

二号機パイロット……アスカ君の心を壊すことなんてできなかった。

弱くなつたのだ……私の心は。

弱さを抱えた私は、いままでの罪を背負って生きることなんてできなかつた。

臆病者だつたのだ。

高圧的な態度をとり、サングラスで人の視線を拒み、強さを保つてきた私は、その鎧をはぎ取られたとき、なにをすることもできない、一人の、弱虫な、ただの中年の男だつた。

私は死を選んだ。

大量の睡眠薬を飲み、普段は飲まないブランデーをあおり、私は意識を手放した。

だが……目覚めることのない眠りは、私には訪れなかった。

私が目を覚ましたとき、まず感じたのは頬への強い痛みだつた。

そして、目の前に広がつたのは、彼女の泣き顔。

普段のクールな彼女からは想像もできない、幼子のような泣き顔は、私の心をえぐつた。

その時、初めて思った。

生きよう、と。

「おやすみなさーい」

「ああ、おやすみ」

眠そうに目をこすっているシンヤに返事をする、その隣に立っている蒼銀の髪の少女に視線を移した。

「すまないな、レイ」

「ううん、私もシンヤと一緒に寝るのは楽しいから。じゃあ、おやすみなさい」

かすかな微笑みを浮かべる少女は、そういつて部屋のドアを閉めた。

とたんに静まりかえるリビング。

どこからか聞こえてくるうめき声だけが、私の耳に届いてくる。

「飲み過ぎだな、あのバカ息子は」

そう呟く声は、自分でも驚くほど穏やかだ。

今日は息子のシンヤの五歳になる誕生日だった。

大学に入学したのを機に一人暮らしをはじめたシンジと、葛城くん、そして彼女と同居しているレイとアスカ君が祝いのために集まってくれた。

最初はシンジと妻がいつしょにつくった料理を食べながら穏やかに談話していたのだが、葛城君が鬼ごろしを取り出したことから状況は一変した。

まずは酒に弱いシンジが撃沈され、葛城君に挑んだアス力君も惨敗を期した。

三番手として選出された私がようやく葛城君に打ち勝ち、三人は泥のように隣の座敷で眠り込んでいる。

数年前ならば想像もできないような状況に苦笑していると、三人を寝かしつけてきた妻がリビングの中に入ってきた。

「おつかれさま」

劳いの言葉をかけながら、用意していた珈琲をカップの中に注ぎ、彼女に手渡す。

「ありがとうございます。・・・本当にミサトったら、シンジくんとアス力は未成年だって言うのに、なにやっているんだか」

怒った口調でばやく妻に苦笑を返すと、隣に座るように促した。

ソファアのくぼみが、二人分になる。

「こんな機会はありませんからな。嬉しかったんだろう、彼女も」

「そう、ですね」

そういつて、彼女は笑った。

・・・再び生きていくことを決意した私は、彼女にプロポーズした。

ユイの時と同じで、普段の私からは想像もできないほどにうたえながら言葉を絞り出している私に、彼女は涙をいっぱいのためにがら頷いてくれた。

それからはいろいろなことがあった。

レイとアス力君への謝罪。

二人のために怒りを放ったシンジとの殴り合い。

そして、和解。

それは痛かったが、とても嬉しい記憶だった。

どこにでもいる、平凡な、普通の親子になれた気がしたからだ。

そのときも彼女は笑ってくれた。

笑って側にいてくれた。

・・・珈琲を飲み干した彼女の肩を、すこし力を込めて抱き寄せた。

突然のことにカップを落としそうになりながらも、私の方へと体を預けてくれる。

結婚を決めた翌日に戻した彼女の黒い髪が、私の頬をくすぐった。

「あぶないですよ、そんなことしちゃ」

咎める口調のリツコに笑いかけると、腕の中にある彼女の細い体を思い切り抱きしめた。

私の背負った罪は一生消えないだろう。

だが、私は、生きていく。

死を選ぶことが償いではないと知ってしまったから。

そのことを教えてくれた人が、私と共に歩んでいくことを望んでくれたから。

だから……私は生きていく。

だから……だから……そのときまで見守っていてくれ。

間違ったときは、叱ってくれ。

まだお前のところには行けそうもないが……もしそちらに行くときには、思い出をいっぱいに持っていくから。

私たちの子供と、私の大切な人たちの話を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4463k/>

優しい風の吹く場所に

2010年10月14日14時13分発行